

厚生労働科学研究費補助金  
難治性疾患政策研究事業  
分担研究報告書

**萎縮型加齢黄斑変性に関する研究**

研究分担者

関西医科大学・医学部・教授 高橋 寛二  
東京女子医科大学・眼科・教授・講座主任 飯田知弘  
九州大学・大学院医学研究院・教授 園田康平  
京都大学・医学研究科・教授 辻川明孝

**研究要旨**：平成27年から開始した萎縮型加齢黄斑変性の診断基準に基づいて行った全国2次アンケート調査による疫学研究のデータ解析を施行し、日本人の萎縮型加齢黄斑変性症例の疫学的特徴を明らかにした。

A. 研究目的

萎縮型加齢黄斑変性は、高齢者の黄斑部での加齢による網膜色素上皮、視細胞、脈絡膜毛細血管の萎縮性変化、Bruch 膜の肥厚・変性に伴って視機能低下を来す疾患である。滲出型加齢黄斑変性とともに加齢黄斑変性の進行期の病型として分類される。平成28年度の難病申請が人数の要件で認められなかったことで、日本のポピュレーションベースの本疾患の有病率を出すために、久山町、長浜町、（参考に舟形町）各スタディの本疾患の基準を調べ、各スタディを統合させて日本における頻度を出し0.15%未満であることを証明する。

B. 研究方法

a. 日本における3つの疫学研究から萎縮型加齢黄斑変性の患者数を明確にする。b. 重症度別の頻度を調査する。

（倫理面への配慮）

本疫学研究にあたっては倫理委員会承認のもと調査を行った。

C. 研究結果

a. 患者数（有病率）については、長浜町スタディから萎縮型加齢黄斑変性の頻度を再調査することとした（late AMDの中から萎縮型加齢黄斑変性の症例数を抽出）。また、前研究班で行なった2次アンケート調査の論文化により日本人の萎縮型加齢黄斑変性の特徴を公表する。

b. については、前研究班で行った疫学的データのみでは症例数として不十分と思われるため、京都大学の萎縮型加齢黄斑変性スタディ（約200例）の詳細データの解析を行い、両データを融合させて重症度別の頻度を出すこととした。

#### D. 考按、E. 結論

萎縮型加齢黄斑変性に対する対策や治療を考える上で、患者数の明確化と重症度別の頻度調査は重要であると思われる。

#### F. 健康危険情報

なし

#### G. 研究発表

1. 論文発表 なし
2. 学会発表 なし

#### H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし